

# でる・あらわれる

鳥谷部 康之

## 1. はじめに

ここでは「でる」「あらわれる」という二つの動詞を考察の対象とした。類義語といっても「でる」は意味の範囲も広く、「あらわれる」と重ならない部分もあるのだが、それも含めて、一つ一つの動詞としての意義特徴を、両者を比較することによって探ってみようと思う。

ここでは、「でる」が使われる文の文型を大ざっぱに分類し、例文をつくり、さらに例文中の「でる」を「あらわれる」に置き換えて、そこに生じる差異がどのようなものかを検討するという方法をとった。したがって各章の見出しは、そこで扱われている「でる」を使った文の文型によってつけた。

## 2. 「～がでる」について

### 2.1. 出現

#### ○人間を主語にする場合

- (1)×目の前に 私の母が でた。
- (2)×目の前に 一人の駅員が でた。
- (3)×目の前に 彼が でた。
- (4)目の前に 人食人種が でた。
- (5)目の前に おいはぎが でた。

この他に主語となるのは「人さらい」「辻斬り」などである。

例文(1)～(5)の「でる」を「あらわれる」に置き換えてみると次のようになる。

- (6)目の前に 私の母が あらわれた。
- (7)目の前に 一人の駅員が あらわれた。
- (8)目の前に 彼が あらわれた。
- (9)目の前に 人食人種が あらわれた。
- (10)目の前に おいはぎが あらわれた。

#### ○動物を主語にする場合

- (11)この辺には 熊が でる。
- (12)この辺には 狼が でる。
- (13)×この辺には 犬が でる。
- (14)×この辺には 馬が でる。

主語として使える動物には、この他に「猪」「虎」「狐」「狸」「カモシカ」などがあり、主語として使えない動物には、「猫」「山羊」「牛」などがある。

例文(11)～(14)の「でる」を「あらわれる」に置き換えて

てみる。

- (15)この辺には 熊が あらわれる。
- (16)この辺には 狼が あらわれる。
- (17)この辺には 犬が あらわれる。
- (18)この辺には 馬が あらわれる。

#### ○鳥類を主語にする場合

- (19)×釧路平野に 鶴が でる。
- (20)×庭に 四十雀が でる。

鳥類で「でる」の主語になるものはないようだ。

例文(19)(20)を「あらわれる」で言いかえる。

- (21)釧路平野に 鶴が あらわれる。
- (22)庭に 四十雀が あらわれる。

#### ○魚類を主語にする場合

- (23)この海域には 鯨が でる。
- (24)×この川には 鮭が でる。

魚類で出現をあらわす「でる」の主語になるものには、他に「大ダコ」がある。

例文(23)(24)を「あらわれる」で言いかえる。

- (25)この海域には 鯨が あらわれる。
- (26)この川には 鮭が あらわれる。

#### ○昆虫を主語にする場合

- (27)この部屋には ゴキブリが でる。
- (28)この部屋には ノミが でる。
- (29)×うちの庭には 蝶が でる。
- (30)×うちの庭には 蟬が でる。

昆虫で出現をあらわす「でる」の主語となるものには、他に「ダニ」「シラミ」などがある。

例文(27)～(30)の「でる」を「あらわれる」に置き換えてみる。

- (31)この部屋には ゴキブリが あらわれる。
- (32)この部屋には ノミが あらわれる。
- (33)うちの庭には 蝶が あらわれる。
- (34)うちの庭には 蟬が あらわれる。

#### ○超自然的なものを主語にする場合

- (35)幽霊が でる。
- (36)怪獣が でる。
- (37)鬼が でる。
- (38)×神が でる。
- (39)×妖精が でる。

「でる」の主語になるものには、この他に「怪物」

「妖怪」「お化け」などがある。

(35)~(39)の例文の「でる」を「あらわれる」にかえてみる。

- (40) 幽霊が あらわれる。
- (41) 怪物が あらわれる。
- (42) 鬼が あらわれる。
- (43) 神が あらわれる。
- (44) 妖精が あらわれる。

○「星」「月」「太陽」を主語にする場合

- (45) 星が でる。
- (46) 月が でる。
- (47) 太陽が でる。

例文(45)~(47)を「あらわれる」で言いかえる。

- (48) 星が あらわれる。
- (49) 月が あらわれる。
- (50) 太陽が あらわれる。

さて、今までに見てきたように、出現をあらわす「でる」には主語として使えるものとそうでないものがある。次にそれらの相違点を明らかにしよう。

○出現をあらわす「でる」の主語になるものについて  
「人食人種」「おいはぎ」「人さらい」「辻斬り」「熊」「狼」「猪」「虎」「鯨」「大ダコ」「幽霊」「怪物」「鬼」「怪物」「お化け」などは一般の人間に恐怖を起こさせるものであり、また、どこでも見られるというものではない。「狸」「狐」も人間に、恐怖というほどではないが何か不気味な感じを与え、普段は人目につかない動物である。「ゴキブリ」「ノミ」「シラミ」「ダニ」のような昆虫も、普段は人目につかないところに潜んでおり、人間に不快感を抱かせる。「カモシカ」は特に人間に不快感や恐怖を与えることはないが、これもまた人目につくことの少ない動物である。

以上から、出現をあらわす「でる」の主語になるものは、人間の日常生活の中ではしょっちゅう見られるものではなく、その多くは一般の人間に恐怖、不快、不気味などの感情を起こさせるものであるということがわかる。

○出現をあらわす「でる」の主語にならないものについて

「でる」の主語にならないものに対して、なるものの特徴は、一般の人間に恐怖、不安、不快などの感情をおこさせないということである。つまり主語とならない昆虫、動物などは人間の生活している世界の中で容易に見られ、また見られない「神」「妖精」なども人間の世界にいて困るものではない。

これらのことから、両者の差異は人間の生活する世界に存在することが許されるか否か、ということになるだろう。すなわち、出現をあらわす「でる」の主語となるものは、その多くが、その性質によって、人間の生活している世界に存在することを拒否されているのだと考えられる。それにもかかわらず、人間の意志におかまいなく、人間の住む世界の中に入ってくる時に、出現をあらわす「でる」が使われるのではないだろうか。

「星」「月」「太陽」は空に出現する。誰にでも見えるが実際には誰もふれることはできない。また必ず定期的に出現し、消える。こういうことから、我々は「星」「月」「太陽」にある種の神格を与え、それらが自分たちの住む世界から、人間の住む世界（人間に見えるところ）に移動してくるという考えを生み、「でる」が使われるようになったのではないだろうか。

「あらわれる」に関しては、出現をあらわす「でる」の主語にならないものも、すべて主語として使うことができる。しかし「ノミ」「シラミ」「ダニ」という小さな虫を主語にしたときに、やや言いにくい。恐らく、主体の姿を、表現者が視覚でとらえることが、「あらわれる」の意味特徴の一つなのであろう。また、何が出現しても主体に伴う恐怖感などはあまり感じられない。

## 2.2. 発生

○人間を主語にする場合

- (51) 事故で けが人が でる。
- (52) 私の町に コレラ患者が でた。
- (53) この家には 代々 狂人が でる。
- (54) 私の町に ノーベル賞受賞者が でた。

例文(51)~(54)を「あらわれる」で言いかえる。

- (55)× 事故で けが人が あらわれる。
- (56) 私の町に コレラ患者が あらわれた。
- (57)× この家には 代々 狂人が あらわれる。
- (58) 私の町に ノーベル賞受賞者が あらわれた。

○動物を主語にする場合

- (59) この頃では 太りすぎで歩けない犬が でるそうだ。
  - (60) 寒くなると 民家を襲う熊が でる。
  - (61) 何百匹に一匹 色の変った兎が でる。
- 例文(59)~(61)を「あらわれる」で言いかえる。
- (62) この頃では 太りすぎで歩けない犬が あらわれるそうだ。
  - (63) 寒くなると 民家を襲う熊が あらわれる。
  - (64) 何百匹に一匹 色の変った兎が あらわれる。

○昆虫を主語にする場合

- (65) 春になると 蝶が である。  
(66) 暖かくなると 蚊が である。  
(67) 何%かの率で 羽のないショウジョウバエが である。

(65)(66)の例文の「である」は出現ともとれるが、卵、幼虫から成虫へというニュアンスを含んでいるので、発生の意味の方が強いのではないかと思い、ここに入れた。

例文(65)~(67)の「である」を「あらわれる」にかえてみる。

- (68) 春になると 蝶が あらわれる。  
(69) 暖かくなると 蚊が あらわれる。  
(70) 何%かの率で 羽のないショウジョウバエが あらわれる。

○「虹」「雲」

- (71) 虹が である。  
(72) 雲が である。

これらは出現にも非常に近いが、「星」「月」「太陽」と違ってそのつど別な新しいものが「である」というニュアンスがあるのでここに入れることにした。

- (71)(72)を「あらわれる」で言いかえる。  
(73) 虹が あらわれる。  
(74) 雲が あらわれる。

○現象の発生

- (75) 電球から 光が である。  
(76) スピーカーから 音が である。  
例文(75)(76)を「あらわれる」で言いかえる。

- (77) ×電球から 光が あらわれる。  
(78) ×スピーカーから 音が あらわれる。  
「光」「音」とも形のあるものではない。

- (79) 夜になると 風が である。  
(80) 堤防がこわれて 水が であつた。  
(81) 倉庫から 火が であつた。

「風」「水」「火」とも、かなりの力または量で「である」とき(79)~(81)の例を使う。特に「水」「火」は災害を起こすときに使われる。

例文(79)~(81)の「である」を「あらわれる」に言いかえる。

- (82) ×夜になると 風が あらわれる。  
(83) ×堤防がこわれて 水が あらわれた。  
(84) ×倉庫から 火が あらわれた。

「風」は目に見えず、「水」「火」もともに具体的な形がない。

- (85) せきが である。  
(86) くしゃみが である。  
(87) あくびが である。

- (88) 熱が である。

「せき」「くしゃみ」「あくび」「熱」ともに人間の意志にかかわらず発生し、または高くなる。具体的な形はもたない。

例文(85)~(88)を「あらわれる」で言いかえる。

- (89) ×せきが あらわれる。  
(90) ×くしゃみが あらわれる。  
(91) ×あくびが あらわれる。  
(92) ×熱が あらわれる。

さて、ここまで発生を意味する「である」を使った例文をいくつか作ってみたが、それらの特徴をまとめてみよう。

(51)~(54), (59)~(61), (67)の例文では、普通のものの中に、そうでないものが発生することが表わされている。

(65)(66), (71)(72), (79)~(81)の例文では、主体が自分の世界から人間の生活する世界の中に入ってくるような感じがある。

(75)(76)でも、主体が音源や光源の中から人間の世界に入ってくるような感じがあるし、(85)~(88)でも主体が人体の内部から外へ移動するという感じがする。

こうして考えてみると発生をあらわす「である」は、主体がある世界からある世界へ移動するというニュアンスをもっていることがわかる。おそらく例文(51)~(54), (59)~(61), (67)においても、異常なものが正常なものの世界に入りこむというように解釈できるのではないだろうか。

これらの例文を「あらわれる」で言いかえてみると、言えなくなるものがかなりある。その多くは、主体が具体的な形を持たないものや目に見えないものである。このことから「あらわれる」には、表現者が主体の具体的な形を視野または意識の中にとらえることが必要なのがある。

「あらわれる」が使える場合でも、そこには発生の意味はなくなってしまっている。「生まれる」という意味ではなく、「姿を現わす」「その存在が確認される」というような意味になっている。したがって(55)(57)の例文も言えなくなる。

3. 「～にである」について

- (93) 彼は 外に であつた。  
(94) 彼は 庭に であつた。  
(95) 彼は 廊下に であつた。

主体が「外」「庭」「廊下」という場所に移動したことを表わしている。

(96) 彼は 学校に でた。

(97) 彼は 会社に でた。

(98) × 彼は 友だちの会社に でた。

この他「役所」などでも同様で、それらにはすべて主体が属してはならない。

(99) 彼は テレビに でた。

(100) 彼は 舞台に でた。

この他に「映画に」「画面に」などでも言える。

(101) 彼は 学校を卒業して 社会に でた。

この他に「世にでる」「社交界にでる」などの言い方がある。

(102) 彼は 毎週 クラブに でる。

この他に「会議にでる」「集会にでる」などの言い方もある。

(103) この道を行くと 駅前に でる。

例文(93)～(103)を「あらわれる」で言いかえる。

(104) 彼は 外に あらわれた。

(105) 彼は 庭に あらわれた。

(106) 彼は 廊下に あらわれた。

(107) 彼は 学校に あらわれた。

(108) 彼は 会社に あらわれた。

(109) 彼は 友だちの会社に あらわれた。

(110) 彼は テレビに あらわれた。

(111) 彼は 舞台に あらわれた。

(112) 彼は 学校を卒業して 社会に あらわれた。

(113) 彼は 毎週 クラブに あらわれる。

(114) × この道を行くと 駅前に あらわれる。

「～にでる」という例文をいくつか作ったが、今度はこれを分析してみようと思う。

例文(93)～(95)では、主体が「外」「庭」「廊下」という場所に移動することを表わしている。

例文(96)(97)では「学校」「会社」などという主体が属している集団への移動を表わし、例文(102)もほとんど同様だが、こちらの方が活動という意味が強い。

例文(99)(100)では、主体が「テレビ」「舞台」という場所に移動したようなニュアンスを感じ、(101)では、主体が活動の中心となるべき場所を変え、そちらに移動するという感じがする。

また例文(103)では、主体が「駅前」という場所に移動することをあらわしている。

「～にでる」は、以上から、ある場所、集団、空間などへの移動をあらわしていると考えてよいであろう。しかし、その出発する場所、集団等と到達する場所、集団等の間には、どのような差異があるのだろうか。

今のところでは、はっきりしたことは私にはわからない。

「～にでる」の例文を「あらわれる」で言いかえた(104)～(114)には移動というニュアンスは全くない。それぞれ「外」「庭」「テレビ」「社会」などは表現者の視野、意識の範囲であり、その中に主体が姿を見せたり、存在を明らかにするというを「あらわれる」は意味している。

また(114)が言えないのは、「この道を行くと」があつて移動をあらわしているため、出現しかあらわさない「あらわれる」が使えないためと思われる。

#### 4. 「～からでる」について

(115) 中から でる。

(116) 奥から でる。

(117) 部屋から でる。

(118) 家から でる。

これらもある場所、空間からの移動をあらわしている。

例文(115)～(118)を「あらわれる」で言いかえる。

(119) 中から あらわれる。

(120) 奥から あらわれる。

(121) 部屋から あらわれる。

(122) 家から あらわれる。

それぞれの場所、空間から表現者の視野の中に主体が入ったことをあらわす。

(115)(116)の場合、「中」「奥」に対して到達する場所、空間はより他の人間との接触の多い所と考えられるが、それがすべてに当てはまるかどうかはわからない。

#### 5. 「～をでる」について

(123) 彼は 家を でた。

(124) 彼は 学校を でた。

(125) 彼は 都会を でた。

これらの例文は、主体が集団、組織あるいは建物、空間から離れることをあらわしている。これも移動の一種とみてよいと思うが、これらの場合は主体が到達する場所や空間は問題とならない。

例文(123)～(125)を「あらわれる」で言いかえる。

(126) × 彼は 家を あらわれた。

(127) × 彼は 学校を あらわれた。

(128) × 彼は 都会を あらわれた。

「あらわれる」は起点格の「を」はとらない。

## 6. まとめ

「でる」についてほとんど共通と思われるのは、移動のニュアンスであろう。それもあつた種の境を超えての移動と考えられるが、

(129) 彼は 出発点を でた。

のような例もあるので、まだまだ検討が必要であろう。

「あらわれる」は表現者に大きく重点が置かれ、その視野に主体が入ってきたとき、または主体の存在が表現者の意識の中に入ってきたときに使われると思われる。

## 7. おわりに

ここでは、主に「でる」を中心に分析を行なったが、その結果、上に書いたようなことが臆気ながらわかってきた。しかしそれと同時に新たな問題も浮び上がってきたし、主体が出発する場所、空間などと到達する場所、空間などの特徴や差異が、もう一つははっきりしない。今後は、一般に反義語とされる「入る」との比較もしてみたいと思っている。

言語経歴：1958年3月東京都杉並区生。

5歳～東京都町田市。

# はぶく・のぞく

小 口 泉

## 1. はじめに

「はぶく」「のぞく」は、国立国語研究所1964の「2. 125保有・除去」の項に属している。この「除去」の項の類義語としては、他に、「略す」「はずす」「排す」「取る」などがある。私は、直観的に、この二語が並行して用いられると思ひ、選んだのだが、例をあげてみると、意外と共通の場で使われることは少なかった。しかし、ある物事から、何かを「はぶく」または「のぞく」つまり「除去する」行為にはかわりない。では、どこに二語の接点があり、また、区別のポイントがあるのだろうか。「はぶく」「のぞく」その行為時の状況、行為後の変化を中心に分析してゆきたい。

## 2. 分析

### 2.1. 対象

- (1) 未成年者を はぶく。
- (2) 未成年者を のぞく。
- (3) 説明を はぶく。
- (4) 説明を のぞく。
- (5) 無駄なことばを はぶく。
- (6) 無駄なことばを のぞく。

以上の例文は、「はぶく」「のぞく」とも、ほぼ同義に使われる例である。このように、「はぶく」「のぞく」には、有情物であるか、無情物であるかという、対象物の種類に関する制約はない。

しかし、対象物が、同じ無情物の範疇にあつても、「はぶく」のみ使われる場合と、「のぞく」のみ使われる場合とがある。

(7) 手間を はぶく。

(8) ×手間を のぞく。

(9) 詳細を はぶく。

(10) ×詳細を のぞく。

以上が、「はぶく」のみが使われる例で、

(11) ×不安を はぶく。

(12) 不安を のぞく。

(13) ×苦痛を はぶく。

(14) 苦痛を のぞく。

以上が、「のぞく」のみが使われる例である。

この違いは、対象の性質そのものの相違からくるのではなく、対象が文の中でおかれている状況、つまり、対象の見方、とらえ方が異なるものと判断される。

たとえば(9)で、「詳細」なことは、時間なり、スペースなりがあれば、入れてもかまわぬが、この場合、入れる必要がないとされ、取り去ってもかまわない状態にある。一方、(14)では、「苦痛」は身体にはあつてほしくないもの、身体から絶対に取り去る必要のある状態になっている。つまり、「はぶく」と「のぞく」では、対象の見方、とらえ方が異なるということになる。

「除去する」の対象物の区別は、「加える必要のないもの」として除去するのが「はぶく」で、「取り去る必要のあるもの」として除去するのが、「のぞく」となる。

### 2.2. 行為時の着目点

ある物事から、何か対象物を除去することが、「はぶく」「のぞく」の共通した行為である。今、ある物事をA(全体)、とりさる対象物をB(部分)とし、「はぶく」